

## 2) いちご「ゆきララ」の安定生産に向けた取組

上川総合振興局 上川農業改良普及センター

### 1. 普及活動の背景・課題

比布町のいちごは、道内トップクラスの作付面積を誇り、町を代表する品目である。しかし、農業者の高齢化により、町内におけるいちごの生産は減少傾向である(図1)。管理作業の負担軽減が課題であることから、町では令和3年から大果で収穫作業の省力化が期待できる新品種「ゆきララ」を導入した。

しかし、「ゆきララ」は従来品種の「けんたろう」と比較して十分な収量が得られておらず、安定生産が課題であった。一方、令和3年度に花・野菜技術センターから、定植時期を「けんたろう」の定植適期から1旬後の遅植えで10%以上多収となる技術が示された。開発技術の実証・定着を図りたい道総研の意向と、比布町の課題が合致し、革新的技術導入による地域支援課題として取り組むこととなった。

### 2. 内容

#### 1) 活動体制の構築

関係機関と取組内容を共有できるよう、JAや町と合意のもと進めた。調査は共同で行い、調査結果は、関係機関・道総研が集まり、定期的に共有した。

#### 2) 定植時期の実態把握

「ゆきララ」栽培農業者を対象に、定植時期について聞き取り調査をした。

#### 3) 実証ほの設置

安定生産技術の有効性を検討するため、令和3～5年に2戸で実証ほを設置した。実証ほでは、従来の8月中旬定植(慣行区)と、9月上旬定植(実証区)の2区を設け、生育・収量を比較した。

### 3. 結果

#### 1) 安定生産技術の有効性

定植時期の実態は、「けんたろう」と同じ8月上旬に行われており、9月に定植している農業者はいないことが分かった。

2カ年にわたる試験の結果、「ゆきララ」の規格

内収量は、実証区で10%以上増加する傾向がみられた(図2)。このことから、従来よりも定植時期を遅らせる技術は、比布町の栽培でも有効であることが確認された。

#### 2) 技術導入の合意形成

実証ほを設置した2戸の農業者は、実証ほの状況と収量データを提示したことで、改善技術の効果を実感し、「次年度も『ゆきララ』を適期に定植したい」と希望して、定植時期を遅らせる技術に興味を示した。

関係機関で試験内容や結果を適宜共有したことで、技術の有効性を認識した。特に、JAや町の職員は調査を通して、適期に定植することで収量が増加することを実感し、技術導入の重要性を理解した。

#### 3) 苗の供給体制の変化

比布町では、JAが一括で苗を供給しているため、採苗体系をすぐに変えるのは困難であった。しかし、農業者の希望に応えるため、可能な限り「ゆきララ」の定植が適期にできるような採苗体系を試みることになった。

当初、この安定生産技術について、農業者や関係機関からは、「定植が水稻の収穫準備等と重なるので難しい」、「JAの採苗体系が乱れる」との慎重な姿勢がみられていた。しかし、2カ年の実証試験結果や共通認識の醸成、農業者の意向を肌で感じたことが、技術導入への意識向上につながった。

#### 4) 安定生産技術の導入

令和5年以降は、実証ほを設置した2戸が定植時期を従来よりも遅い8月下旬に変更している。

### 4. おわりに

本活動では、地域の課題に関係機関が一体となって取組み、有効性を確認・共有したことで、技術導入に対する共通認識が得られた。これを契機に、比布いちごの更なる拡大・振興へつながることが期待される。

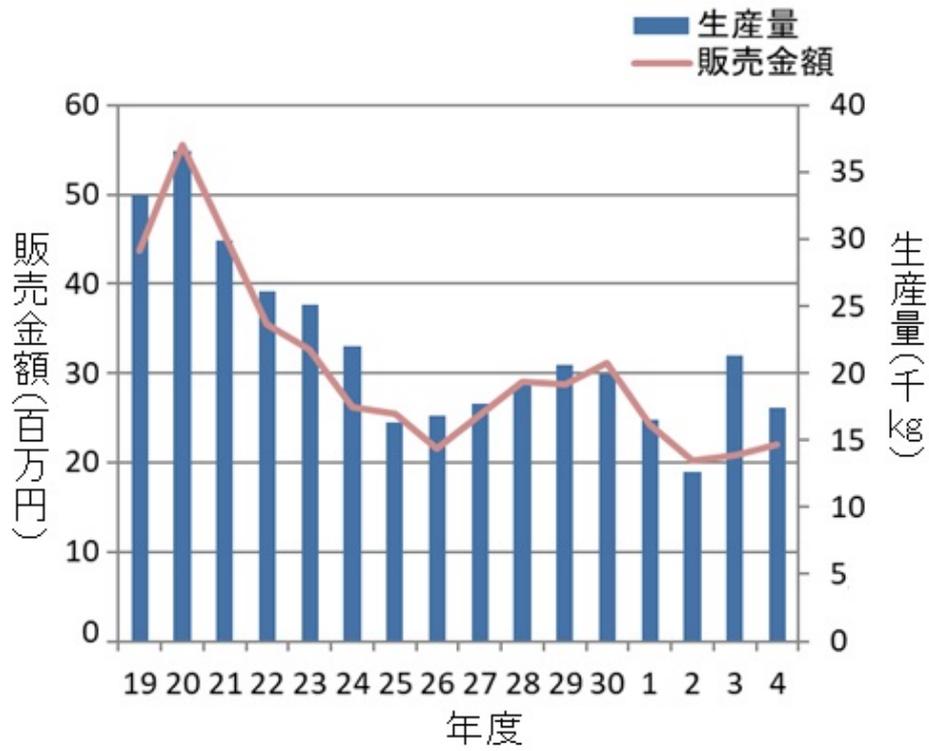


図1 いちごの生産量と販売金額の推移  
(R5 JAびっふ町)

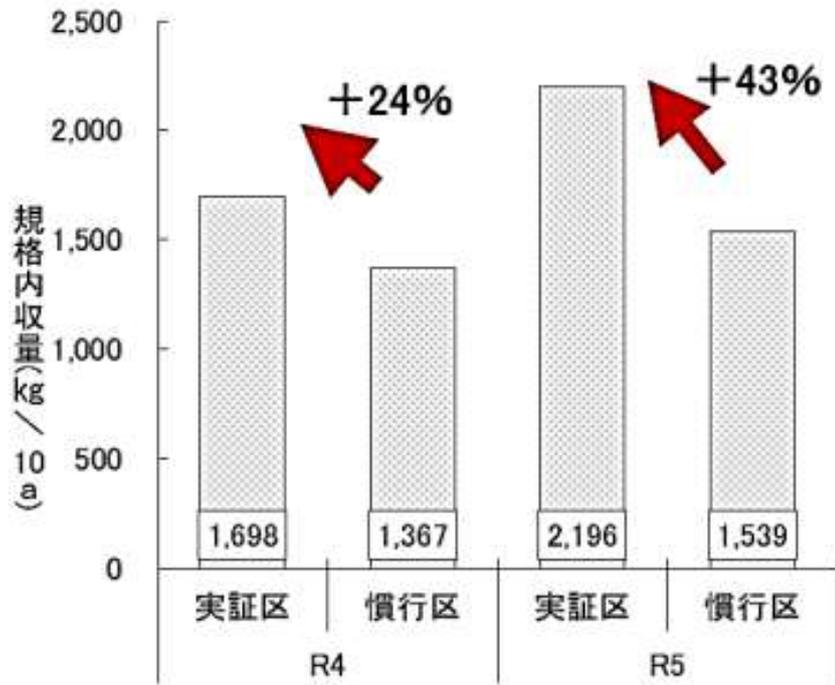


図2 収量調査の結果 (ほ場A)